

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2017 年 3 月

82 号



〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com

http://keaf-japan.com

「開発独裁」に加速度

カンボジア再建と KEAF の 10 年 高度成長の「光」と「影」

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) が支援活動をはじめて今夏で満 10 年になる。四半世紀におよんだ戦争が終わり、国家再建の方向が固まって開発独裁型の経済に加速度がついた時期に当たっている。この時代の変遷をたどりながら、次の 10 年の支援の在り方に思いをめぐらせている。

侵された「中立」

シアヌーク殿下の中立カンボジアが冷戦下に米国のベトナム戦争に引きずり込まれたのが、この小国の悲劇の始まりだった。戦争終結と同時に極左ポル・ポト政権の恐怖政治が始まり、さらに米中ソの代理戦争に仕立てられた内戦が 20 年余も続く。国民の 3 分の 1 近い 200 万人が犠牲になり、国土も壊滅的な破壊を蒙った。

「2 人首相」から独裁へ

冷戦終結で代理戦争も終わり、国連監視の下にカンボジア王国が復活したのが 1993 年。だが新政権は王党派ラナリット殿下と、フン・セン人民党首の 2 人首相という異常なスタートだった。フン・セン氏は 4 年後、クーデターでラナリット殿下を追放、以来、着々と長期独裁体制を固めてきた。2000 年前後から外国援助と外資呼び込みによる年 4 - 6% の経済成長が始まった。KEAF が支援を開始した 2007 年あたりから高度成長にはずみがついた。

プノンペンの町は訪問の度に街燈が増えで明るくなり、新しいホテルや巨大な政府機関の建設が進み、超高層ビルも立ち並ぶようになった。車の数も急速に増え、猥雑な過密都市に変貌した。

農村にも変化の波

プレイヴェン、スバイリエン両州の農村地域にも数年遅れの 2010 年ごろから変化の波が押しよせた。支援する小中高校のうち車で行けるのは国道に近い 5-6 校、そのほかは地元民のバイクに乗せてもらいか徒歩だったが、凸凹の泥んこ道が少しずつ舗装されて、乾季には車で行けるようになった。道路わき

に電柱が立ち始め、電線が張られ、自分で線を引き込める公的機関、高校職員室、有力者の家などに電気が点いた。

プノンペンに行ったことのある生徒はいなかった。高校 3 年生を日帰りの修学旅行に連れて行って喜ばれたが、これも 2011 年の 3 回目で役割を終えた。

高校奨学生の中から中途退学する生徒が年々増えた。中国やタイ、ベトナムなどの賃金上昇を嫌った先進諸国の工場がプノンペン周辺の工業団地に移転してきて「出稼ぎ」に持って行かれたのだ。

奨学生は家族で初めての高校進学者だった。最近では高校進学が普通になってきた (卒業できない生徒も少なくないけど)。KEAF 奨学生は延べ 1018 人。

私立大学ブーム

戦前 (1970 年まで)、大学は首都に国立校が 11 校あっただけだった。2000 年代にはいると倍増して現在、22 大学。私立大学ブームも起こって地方 3 都市を含めて 25 大学が開校、短期大学や専門学校も数多い。この地域では大学進学者はまだいないけど夢を与えてほしい、という高校長の要望で 2009 年に初めて 1 人に

大学奨学金を出した。これまでに 12 人、うち 7 人は卒業して社会に出ていった。

校舎も教員もまだ不足で、全国的には二部授業が解消されていない。しかしユネスコや日本、米欧の NGO、慈善団体などの支援もあって新校舎の建設が目につく。プロモルプロム、タッコー両高校には地域では初めての 2 階建て新校舎ができた。KEAF の前身、CEAF が 1990 年代に建設・寄贈した 4 校が古ぼけて見えるようになった。

「1 人でも多くの子どもに・・・」

途上国の経済開発のパターンをその末端で、まざまざと目にしてきた。「光」の影に独裁、腐敗、格差のさらなる広がり・・・「1 人でも多くの子どもに教育の機会を」というモットーをこれからも大事にしていきたい (金子敦郎)。

写真はプノンペン近郊、縫製工場近くの屋台で昼食をとる女子社員たち。



サッカー・ブームを実感

6回目の「サッカー教室」

池内 秀樹

第6回「サッカー教室」を群馬・県立高校の体育の先生2人を支援する形で昨年12月27日から大晦日までの5日間、実施し、こどもたち、これから体育の先生になる体育教員養成学校の生徒や学校関係者に大変、喜ばれた。印象的だったことは、カンボジアが今、ものすごい勢いでサッカー・ブームが進行していることだった。

今回の「サッカー教室」には6年前の第1回から指導してくれた群馬県立渋川青翠高校の小林俊文先生、今回初めてカンボジアを訪れる県立渋川高校の大塚達夫先生が加わった。



KEAFが支援する東部プレイベン州の高校3校、小学校2校（1校はベトナム国境に近いスバイリエン州にある）、プノンペン市内の体育教員養成学校で、体育教員養成学校を除き、各校とも、でこぼこだったり、ぬかるみが残っていたりする校庭のグラウンドで、一部の生徒は裸足のまま、懸命にボールを追った。

小学校では、テレビもない僻地のせいかな、サッカーを見たこともないこどももいて、まずは両手でボールを持ち、ほかの生徒のボールと合わせっこをする「ボールでこんにちは」や、ボールでほかの生徒のお尻にタッチする「お尻ブリット」などボールに慣れさせる10種類のお遊戯をし、こどもたちは大喜び（ネットのKEAFホームページにこのときの模様を写した動画を掲載しました）。各校に3～10個のサッカーボール計30個を提供し、保育科コースで学ぶ前橋市の専門学校学生が折った千羽鶴などの折り紙ざっと400枚をこどもたちに配って5日間の講習はあっという間に終わった。



カンボジアではこのところサッカーが急速にブームになっていた。首都プノンペン、プレイベン州に向かう国道1号線やその支線には、フットサルの競技施設があちこちにできていて、手軽にミニサッカーを楽しむ風景が見られたし、訪れた高校では、他校との交流試合が行われていた。昨年前半には、全く見られなかった光景である。プノンペンのシアヌーク・スタジアムでサッカー試合があっても、数年前だと、300～400人の観客が集まるだけだったが、いまでは、国内チーム同士の試合でもほぼ満員になり、国際試合ともなると、入りきらないほどの観客が集まるという。

支援対象校のプロモルプロム高校近くのフットサル競技場では、同校の男子チームと近くの市場の店員チームとの対抗試合があり、ポーン校長が観戦しているところにも行き合わせ、サッカー・ブームを実感することになった。

KEAFとしては、本来の奨学金支給や教材支援を続けながらも、こういう状況に接すると、やはり関心を持つだけでなく、財政難のなかでの今後の「サッカー教室」支援の在り方を考えていかなければならないだろう。（池内秀樹）



写真：左段はボール遊戯を教える小林先生。右段の上はボールに触れて大喜びの同小の子どもたち。いずれもソンボン小学校。同下はピッチを放し飼いの牛が横断、ゲームは一時中断。コンポントウラバイ高校で。

「忘れていたもの」があった

カンボジアでサッカーを教えて

大塚 達夫

私は、群馬県の渋川高校で体育教師をしながらサッカー部の指導もしています。今回、毎年カンボジアにサッカーを教えに行っている小林俊文先生をサポートする形で、初めてカンボジアを訪問しました。我々、戦後生まれは、大きな苦労もなく、高度経済成長の中、自分の夢を追いかけて人生を送ってきました。気が付くと 50 歳を過ぎ、他人と競い合う人生に疑問を持つようになりました。昨年は、リオオリンピックが開催され、多くのアスリートが、「活躍して子供に夢を与える」とコメントする姿が見られました。「自分の好きなことで、華やかな舞台に立つことが、夢?」。豊かさの中で、みんな自分の欲望を満たすことを追い求める社会に何か違和感を覚えました。カンボジア訪問の目的は、「電気も水道も通っていない農村部の子供達にサッカーを教えること」ですが、「日本人が忘れた大切な物を探すこと」も私にとって大きな目的でした。

12月27日、初めてカンボジアに降り立ちました。首都プノンペンの人々の多さ、自動車とバイクの交通渋滞、路肩に溢れる屋台など、町は活気に満ちていました。高層ビルの建設ラッシュ、海外企業の進出、カンボジアは、自分が想像していたよりもはるかに発展していました。と同時に、目の当たりにする大きな貧富の格差、スマートフォンの普及に見られる急速な情報化、あまりにも急速な経済発展に危うさを感じました。でも、この国の人のエネルギーや逞しさは、確実に日本を凌駕していることは確かでした。

我々は、カンボジア南東部に位置する、プレイベン州にある小・中・高校を訪問し、サッカーを指導しました。言葉が通じないので、上手いかわない部分も多かったのですが、一緒にボールを蹴って、積極的に子供達と関わることができました。校庭には、牛がいて、牛の足跡で凸凹でした。牛の糞もあちらこちらに落ちていました。裸足の子供も沢山いました。日本の感覚では、サッカーができる環境ではありませんでした。しかし、みんな楽しそうにサッカーをやっていました。「サッカーができるまでにカンボジアは発展したのだ」

そんな喜びを噛みしめているようでした。

ソンポン小学校へ行った時でした。我々のサッカーボールを積んだキャラバンが学校に到着すると、大勢の子供達が、車を取り囲みました。子供達の興味津々とした嬉しそうなあの表情は、日本では見たことのない表情で、とても印象的でした。

コンポントウラバイ高校では、女子のサッカーの練習試合に学校中の生徒が応援していました。娯楽がないのかもしれませんが、カンボジアの人達は、仲間を大切にしていました。仲間が怪我をすると皆が気遣っていました。一人では生きていけないことを皆が知っているようでした。それは、サッカー以外の生活でも感じられました。日本が失ったものがそこにはありました。「物が豊かになればなるほど、心は貧困になる」。それが確信に変わった瞬間でした。

学校には、電気も水道ありませんでした。まずは、電気と水道から始めて、凸凹のグラウンドを整備して、

木枠だけのサッカーゴールにネットを張って、言葉が話せれば色々なことが教えられる……カンボジアでは、やってやりたいことが沢山思い浮かびます。ボールがあることが当たり前、グラウンドは、整備されていて当たり前、サッカーを教えて貰って当たり前、何もかもが当たり前の日本の子供達とは大きな違いです。指導者としての「喜

びの原点」がそこにはありました。

今回のカンボジア訪問で一番感じたことは、物がないと、人間の生きる本質的な姿が浮き彫りになり、日本のように物が満たされると、どんどん生きるという本質からかけ離れたバーチャルな生活になっていく、このカンボジアと日本が対比でした。そしてどちらが幸福なんだろう？

今回は、貧国、カンボジアを支援するという目的でしたが、多くのことを学び、逆にカンボジアの豊かさも感じた旅でした。今回、このようなチャンスをいただいた小林先生、KEAF に感謝いたします。また、KEAF の池内さん、現地通訳さん、運転手さんには、現地にて大変お世話になりました。移動の車中、カンボジアの歴史、生活、国民性など沢山の会話ができ、実に中身の濃い旅となりましたことに感謝いたします。

(注)大塚達夫さんは小林俊文さんが先生になって最初の教え子だそうです。今回初めて「サッカー教室」に加わっていただきました。写真の左奥の黒シャツ姿が大塚さんです。アンサー小学校で。



ありがとうございました (2016年11月28日～2017年2月28日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます (敬称略させていただきます)

(神奈川)	(東京)	(神奈川)	(東京)	(東京)	(東京)
(東京)	(千葉)	(東京)	(東京)	(千葉)	(神奈川)
(千葉)	(埼玉)	(千葉)	(秋田)	(東京)	(神奈川)
(東京)	(埼玉)	(東京)	(東京)	(千葉)	(神奈川)
(東京)	(長野)	(東京)	(埼玉)	(東京)	(神奈川)
(群馬)	(神奈川)	(神奈川)	(東京)	(東京)	
(東京)	(大阪)	(東京)	(東京)	(東京)	(神奈川)
(東京)	(東京)	(秋田)	(神奈川)	(東京)	
(東京)	(宮崎)	(埼玉)	(千葉)	(東京)	(京都)
(名古屋)	(東京)	(東京)			

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています ※写真つき奨学生紹介の4、5、6、7頁は個人情報保護のため省略

疲れ知らずの子どもたち

チャリティ・サッカーでカンボジア支援

KEAF が始めたカンボジアでの「サッカー教室」を継続させるための「カンボジア smile チャリティ@やちまた」サッカー大会が2月12日(日)、千葉県八街(やちまた)市スポーツプラザで開かれました。幼稚園生から父兄を含めた大人までの200人余りが寒中とは思えない日差しの中で、さまざまなグループに分かれてサッカーを楽しみました。昨年に続いて2回目です。

疲れを知らないちびっこ選手たちの元気さと、お父さんたちを右往左往させるボールさばきの巧みさにびっくり。「みんなサッカーが大好きで、私たちが週に何日も教えているんですよ」。主催団体の市サッカー協会の指導員が嬉しそうに言っていました。



KEAFからは「サッカー教室」の指導に当たっている小林俊文先生(渋川青翠高校)、岡宮、金子にカンボジアからの留学生メタ君(東大大学院土木工学)とラ

◇物品支援ありがとうございました

(東京)：トートバッグ 6、ボールペン 40本、ノート・メモ帖 40冊。

タナさん(群馬大大学院情報工学)が参加しました。若い2人は思い思いのグループに入って走り回り、「日ごろ勉強ばかりなので、とてもいい運動になりました」と喜んでいました。

参加者は高校生以上1000円、中学生以下500円の参加費を出して、経費に充てた余りは、市の社会福祉協議会を通して「サッカー教室」のために寄付してくれることになっています。



2012年の「サッカー教室」に参加してくれた八街アカデミックスポーツクラブ(NGO)代表で市サッカー協会会長でもある小林茂さんが、国際交流事業のひとつとして「サッカー教室」支援のために、昨年からの「チャリティ・サッカー」をはじめてくれたのです。

参加者からは現物支援として乗用車のトランクと後部座席が一杯になるボール、靴、パンツ・シャツなどサッカー用具をドッサリと頂戴しました。主催を引き受けてくれた八街市サッカー協会の関係者の皆さん、参加してくれた幼稚園、小中学校、高校の生徒や父兄の皆さんに心からのお礼を申し上げます。